

禅の友

Zen no Tomo

8

August 2026





ご本山だより

大本山永平寺

【大燈籠流し】

大本山永平寺

福井県吉田郡

☎ 〇七七六―六三―三一〇二



白山^{はくさん}の山裾^{やますそ}を洗う九頭竜川^{くづりゅうがわ}のせせらぎにのせて、亡き人々の安寧^{あんねい}を願う「大燈籠流し^{だいとうろうながし}」も今年で第三十九回を迎えます。

山影^{さんえい}が伸び、ひぐらしの涼やかな声が満ち始めると、川音響く河川敷には祈りを捧げる人々が集まってきます。夜の帳^{とばり}が下りる頃、永平寺の僧侶による「大施食会^{だいせじきえ}」の読経が厳かに響き渡り、その後、心静かに身と息を調える「静坐^{じようざ}」の時間は、先祖より連なり、多くの縁と繋がる命のあり様^{ようさま}を再確認させてくれます。

最後に、皆さまの願いを託した燈籠^{とうろう}がゆらゆらと水面を滑り出していく様は、実に幻想的です。道元禪師の傘松道詠^{さんしょうだいてい}に山深み峯にも尾にもこゑたてて

けふもくれぬと日ぐらしぞなく
という御詠^{ごえい}があります。

山深き峰々からも尾根からも「今日も一日が暮れてしまうぞ」と鳴くひぐらしの声。それは、二度と戻らない「いま」という時間の重さと尊さを伝えてくれていくようです。

亡き人に想いを馳^はせる方々へ、修行に励む私たちができるのは、亡き方も残された方も、ただ安らかならんことを願うことだけかもしれません。しかし、瞬間瞬間、自分にできることに全身全霊を傾ける。それこそが、連なる命に対する私たちの修行に他ならないのです。

幾千の燈籠に託された心に寄り添い、一心に手を合わせる。川面^{かわも}をゆらめく美しい光は、亡き人々の安寧を祈る心そのものであり、「いま」を精一杯に生きる誓願の光でもあるのです。



ご本山だより

大本山總持寺

【旧盆と祖蹟巡拝】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎ 〇四五―五八一―六〇二二



盛夏を迎えて連日猛暑が続いており、僧堂の修行環境も大変きびしくなっております。

八月は旧盆の月です。先祖を思い、父母、きょうだいの在りし日のおもかげを抱くと同時に、感謝の心を表していくことが供養となるのです。

旧盆の總持寺は修行僧のほとんどが師寮寺（師僧のお寺）補佐で帰省し、さすがの總持寺も、もの寂しい雰囲気包まれます。

特に、今春上山した修行僧にとっては初めての帰省であり、たくましく成長した姿をご本師やご寺族、お檀家の方々に見ていただく好い機会となっております。旧盆が終わり、それぞれの師寮寺から修行僧が戻ってくると、總持寺は再び活気に溢れます。

また、八月下旬には「祖蹟巡拝」が行われます。御開山瑩山紹瑾禪師や二祖峨山韶碩禪師縁の地を参拝いたします。

巡拝の最初には石川県羽咋市の永光寺を

参拝いたします。伝燈院にて拝登し、瑩山禪師の墓所にて読経し、五老峯という墳丘型の靈廟にて手を合わせます。

五老とは天童如淨さま、道元さま、懷奘さま、徹通義介さま、瑩山さまの五名の祖師がたのことで。伝燈院にはこれら五名の木像が安置されており、五老峯には五名の遺品等が埋納されています。

次に、總持寺が横浜に移転する前の約六百年の歴史を受け継ぐ、輪島市門前町の總持寺祖院を参拝いたします。大祖堂と伝燈院で瑩峨御両尊に拝登をし、龜山墓地の二祖峨山禪師の墓所にて読経いたします。

この祖蹟巡拝で、修行僧たちは曹洞宗の成り立ちや總持寺の歴史を自分の眼で学び、御開山さまや二祖さまをより身近に感じることが出来るのです。同時にそのことは、祖師がたの教えが脈々と相承されていることを実感することにも繋がるのです。

選・坊城俊樹

山積みの薬味の下の初鰹

千葉県 野末 トヨ

評

これはまた豪華な初鰹が出てきた。その新鮮なボリユーム感は美味しくない訳がない。「薬味」に注目したところにも俳味があって面白い。作者のご住所を伺うとどうやら千葉県の外房の海が近いらしい。これまたとびきり新鮮な初鰹であろう。

田植機を操る嫁の逞しき

島根県 藤江 堯

評

なかなか働き者のお嫁さんが嫁がれて来られたのであろう。田植機をもう悠々と操られている姿は逞しくも美しい。もうこれでこの家の行く末は安泰である。たまには息子も褒めてやらねばならないだろう。いや失礼、息子さんあってのお嫁さんである。

◆ 本堂に新緑満ちて坐禅会

山口県 稲村 みどり

◆ 花は葉に内周率の暗記中

秋田県 土谷 敏雄

◆ ほうたるに水やはらかく匂ひけり

大阪府 柏原 才子

◆ 行く春や異形の僧は軸の中

愛知県 渡辺 秀子

◆ 薰風や急階段の文化財

静岡県 末光 愛正

◆ 空をけるややの素足の丸丸と

兵庫県 松井 弘子

◆ 夜釣舟みな少年の顔をして

埼玉県 中島 由美子

◆ 閉校の校歌忘れず青田道

山口県 藤野 祥子

◆ 街の灯を冷やす川面や遠賀川

千葉県 甲斐 勇

◆ 蒼穹に白ハンカチのひらめける

愛知県 後藤 美帆

選者吟

日比谷公園の夕焼赤すぎて

俊樹

作句小見

東京のご真ん中にある公園を吟行したときの写生句。都心の濁った空かと思いきやその日の夕焼けは恐ろしいほど美しかった。俳人とは何かと言葉巧みに写生をするものなのだが、この日はもう「赤すぎて」としか言葉が出て来なかった。

選・長澤ちづ

沈みゆく夕日を天に戻さむと声を限り
の雲雀の合唱

鳥取県 眞山博允

評

雲雀のさえずりが聞けるのは早朝や夕方らしい。都会に住んでいると、詠われている光景には中々出会えない。まして沈みゆく夕日を天に引き戻すほどの合唱と詠う。作者の心の昂ぶりがうかがえるようだ。

一日終え明日のために米を磨ぐ白い小
粒のいとおしきこと

秋田県 小松紀子

評

米粒へのいとおしさの気持ちは、無事終えた一日への感謝と明日への祈りのようでもある。ささやかだが、万人がもつ願いをかざらずに詠っている。

◆ 雨あがり鶉かしましく啼く朝の窓よりのぞむ恵那山ちかし

岐阜県 丸山正己

◆ うららかな春陽のそそぐ畦道に手籠いっぱい土筆摘みたり

愛知県 館 一子

◆ かつて叔母にもらひし菖蒲咲く美しく今は施設に居ると聞きたり

岐阜県 後藤 進

◆ 別れ来し人への思いつのりくる春の雨ふる一人の部屋に

鳥取県 徳本 義則

◆ 藤棚の下に其蔭しき琴寝かす琴柱にふれる藤の花房

長崎県 崎田 定雄

◆ 音読が良きと知りたる独居われ一行目を先づ息とのへて

兵庫県 前田 あつ子

◆ ひと月を留守にせし庭に一本の白百合咲けりはつかにゆれて

鳥取県 井上 美幸

◆ 集落の大きいぐねが萌え出れば南瓜の苗木二本購う

福島県 佐藤 忠

◆ 人間に聞こえぬ声のあるらしく朝顔点呼に応え咲きゆく

青森県 菊池さとよし

◆ 大粒のばらばら雨に春疾風われはずぬれ魚になりて

岩手県 千葉 喜恵

選者詠

アカシアの花がほろほろこぼれいて夜道に

ちづ

つづく春の目印

作歌小見

佐藤さんの歌の「いぐね」とは、主に東北地方で冬の風や雪から家を守る屋敷林や垣根のことのようです。集落のそいつた木に新芽が出るのを合図に、いつもの農作業をする作者なのでしょう。